

# 雑誌『青い海』を表象文化論から解く - I

Unraveling the Magazine 'Aoi Umi (Blue Sea)' from a Research of Artistic Representational Culture - I

豊見山 愛 TOMIYAMA Megumi

## Abstract

In this article, we set the scope of the study to the period (1971-1981) during which Tsuno Soichi worked as the editor of 'Aoi Umi (Blue Sea),' a magazine that was started in Osaka in 1971 as a specialized magazine about Okinawa, with the purpose of uncovering the society of Okinawa at the time through the relationship between the founder Tsuno Soichi and authors, philosophers and people in the field of art.

Tsuno hoped to inspire pride in Okinawan culture among the people of Okinawa by publishing 'Aoi Umi (Blue Sea),' which was based in Osaka. The background to this was the issue of discrimination suffered by those coming to Osaka from Okinawa at the time due to the depression after World War I. For example, there were notices of "No Koreans or Ryukyuan" around Osaka before and after the war. The intended readers of 'Aoi Umi (Blue Sea)' when it was started were the people from Okinawa who lived in Kansai region, and Tsuno was determined to create a magazine that could restore the spirit of Okinawa in these people, who were troubled by a sense of inferiority and loneliness.

Keywords: Magazine research, Artistic representation research, Postwar Okinawa, Life history

キーワード：雑誌研究、芸術表象研究、戦後沖縄、ライフヒストリー

## 1 はじめに - 研究の目的

本稿では、1971年に大阪で創刊された沖縄の雑誌『青い海』について、津野創一が編集長を務めていた時代（1971-1981年）<sup>1</sup>を研究の対象範囲として、創刊者の津野創一と、作家、思想家、美術家との関係から当時の沖縄の社会について、明らかにしていくことを目的とする。

雑誌『青い海』（以下、『青い海』と呼ぶ）に焦点を絞り、当時の社会状況を照射して位置づけることは、沖縄の芸術に関する事例研究の少なさを補完できるものと考えられる。例えば雑誌『琉大文学』に関していえば、我部聖<sup>2</sup>をはじめ、文学・思想研究の対象として、その社会的意義が説かれてきた。しかしながら、毎号特集を変えるスタイルで郷土文化誌を標榜する『青い海』に関しては、その領域の広さと執筆者のバラエティーさで、硬軟織り交ぜた大衆的な表象文化論の輪郭を帯びている。いずれにしても、これまで研究対象として、わずかにしか認識されてこなかった県外のウチナーンチュの思いが、三人社による復刻版出版<sup>3</sup>を機に『青い海』を通読できることの可能性は大きい。さらに、その出発点が日本復帰前の沖縄から離れた大阪で創刊されたことは、関西沖縄県人史の観点からも、価値のある研究対象であることは間違いない。

注1 編集長の変遷については、津野創一（71年4月創刊号-80年12月99号）、山城賢孝（81年1月100号-82年4月112号）、高江洲義寛（82年5月113号-85年6月142号）、玉元清士（85年7月143号-85年9月145号）となる。

注2 我部聖（がべ さとし、1976-）沖縄大学経済法学部准教授。専門は沖縄近現代文学、思想史。

注3 株式会社三人社『青い海』【復刻版】戦後の地方新聞・雑誌シリーズ10全145冊・別冊1〈1971年～1985年〉刊行年月／2022年10月～2025年11月。

『青い海』は、日本復帰直前の沖縄を見つめつつ、集団就職者の若者が多かった 1970 年代の初めに大阪で創刊された。加えて、1975 年からは沖縄へ事務所を移転したことで、その読者層の変化を検証するだけでも、これまで着手しえなかった大きなテーマとなりうる。

次に、沖縄の美術を研究対象とする筆者が、沖縄の芸術領域において『青い海』を主題的に論じる意義は、戦後沖縄の歴史的特異性にある。特に貧しさゆえの、集団就職者の窮状を目の当たりにしたことで、自らの職を辞してまで雑誌作りに奔走した津野創一に注目することは、その後の『青い海』を考察する上で重要な鍵となる。装丁をみても、創刊号の表紙を飾るのは、儀間比呂志<sup>4</sup> (写真1) であり、その後も大城皓也<sup>5</sup> (写真2)、玉那覇正吉<sup>6</sup> (写真3) などの美術家が名を連ねた。

特に、儀間比呂志は、筆者の聞き取り調査 (2008) の中で「戦争でも沖縄の青い海だけは唯一破壊できなかった。」という思いを込めて『青い海』と雑誌名を付けたと語るほど郷愁にあふれ、津野との関係も深かった。津野は雑誌『青い海』で沖縄を離れた若者達に、沖縄の文化に対する誇りを惹起したいと考えていた。その背景には、第一次世界大戦後の不況時から続いた、当時の沖縄出身者が大阪で受けた差別問題があった。例として、戦前や戦後の大阪で「朝鮮人・琉球人お断り」という張り紙があった<sup>7</sup>ことがあげられる。

主に『青い海』創刊初期の読者対象は、関西在住の沖縄県人に対してであり、劣等感や孤独感に満ちていた彼らに沖縄の魂を取り戻す雑誌を作りたいと、津野は強く思っていた。

以上のようなことから、『青い海』に関する研究を進めていくに当たって、本美術館紀要で3回にわたり研究の成果を示していきたい。

## 2 先行研究について

岡本恵徳<sup>8</sup> (1993)<sup>9</sup> は、津野が編集に携わった 1971 年から 1981 年にかけて、『青い海』創刊号から 100 号までの内容について、「開発と自然破壊」、「公害」、「都市」、「教育」、「老人」、「医療」など今日でもなお、問われ続けている問題が先駆的に取り上げられているとし、また、わらべ歌や昔話、染や織、焼きものなどの伝統工芸、さらには真喜志康忠<sup>10</sup> や大宜見小太郎<sup>11</sup> のウチナー芝居、文学では「おもろ研究」の研究と鑑賞、山之口貌<sup>12</sup>、大城立裕<sup>13</sup> を特集として取り上げ、沖縄の歴史と伝統文化の再発見を命題としていた、と指摘する。さらに奄美から八重山を視圏に入れ、森口豁<sup>14</sup> や伊高浩昭<sup>15</sup> らを執筆陣に加えたことも、注目に値している。

三木健<sup>16</sup> (2024)<sup>17</sup> は、1981 年の通巻 100 号までを執筆対象として、津野の人生を大まかに①青少年期 (1937 年誕生 -1956 年高校卒業)、②琉

注 4 儀間比呂志 (ぎま ひろし、1923 - 2017 年) 版画家、絵本作家。主に沖縄の風土、戦争などをテーマにした作品を手がけた。

注 5 大城皓也 (おおしろ こうや、1911 - 1980 年) 洋画家。

注 6 玉那覇正吉 (たまなは せいきち、1918 - 1984 年) 彫刻家、洋画家。

注 7 金城馨 (かなぐすく きんじょう かおる) 『沖縄人として日本人を生きる』解放出版社、2019 年、19 頁。

注 8 岡本恵徳 (おかもと けいとく、1934 - 2006 年) 近現代沖縄文学研究者、思想家。

注 9 岡本恵徳「津野創一と雑誌『青い海』と」『青い海の彼方へー津野創一の世界 遺稿&追悼文集ー』ニライ社、1993 年、470-475 頁。

注 10 真喜志康忠 (まきし こうちゅう、1923 - 2011 年) 戦後ときわ座を結成して座長となり、沖縄芝居の復活につくす。1961 年重要無形文化財 (総合指定「組踊」技能保持者)。

注 11 大宜見小太郎 (おおぎみ こたろう、1919 - 1994 年) 俳優、脚本家、演出家、舞踊家。

注 12 山之口貌 (やまのくち ばく、1903 - 1963 年) 詩人。

注 13 大城立裕 (おおしろ たつひろ、1925 - 2020 年) 小説家。1967 年、『カクテル・パーティー』で芥川賞受賞。

注 14 森口豁 (もりぐち かつ、1937 - ) 琉球新報社、日本テレビ沖縄特派員を歴任。ジャーナリスト。

注 15 伊高浩昭 (いだか ひろあき、1943 - ) ラテンアメリカ研究者、ジャーナリスト。

注 16 三木健 (みき たけし、1940 - ) 1965 年琉球新報社に入社。元・琉球新報社取締役副社長。著書に『八重山近代民衆史』、『沖縄・西表炭坑史』、『宮良長包ー沖縄音楽の先駆ー』など。

注 17 三木健「沖縄戦後史の中の『青い海』時代ー編集長・津野創一の足跡を追ってー」、『青い海復刻版 別冊』三人社、2024 年、11-30 頁

球新報記者時代（1956 年入社 -1970 年退社）、③『青い海』の時代（1971 年創刊～1981 年まで）、④推理作家の時代（1981 年 -1992 年死去）と 4 期に区分し、それぞれについて論じている。

村上陽子<sup>18</sup>（2024）<sup>19</sup>は「初期の誌面には、ことに強く津野のカラーが反映されていると言える。」と、津野と『青い海』との関係について指摘した。

これらの研究は『青い海』が沖縄にとってどのような存在であったか、また津野創一が『青い海』にとって、ひいては沖縄にとってどのような存在であったかを検証している。しかし創刊当初、若者を主たる読者に据えたのは、求人広告の媒体を求めていた「オキナワ通信」<sup>20</sup>の社長が発行人である所以でもあり、沖縄の若者に向けて、進学や企業の就職を促進する媒体として『青い海』が求められていた事実も看過できない。

また、松下博文<sup>21</sup>（2021）<sup>22</sup>は、雑誌『青い海』創刊号について、儀間比呂志の表紙画を沖縄に対するディアスポラな好奇心に帰するアイコンとして捉えている。さらに大阪で創刊された際、「青い海」に沖縄の広告が 1 本もないと捉えて「その背後に近代沖縄のディアスポラがチラついている。」と指摘している。これらの指摘は、ディアスポラやオリエンタリズムという概念を通して『青い海』やその表紙を飾る作品分析の可能性を示唆している。しかし松下が設定する「ディアスポラ」概念の背景については、稿を改めて熟考をしてみたい。離散コミュニティをディアスポラとして再解釈をするのならば、その内部におけるアイデンティティの問題にも目を向けなければならない。関西沖縄県人の持つ重層性と苦みのありようは、沖縄本土との隔たりを共有する集合体と個との葛藤の中で、必ずしも一括りにはできないはずである。

以上、これまでの先行研究から導き出された数々のあいまいな点について本論文で明らかにした上で、沖縄の芸術活動がいかに横断的かつ超域的であったかを、文献及び筆者による聞き取りで得た津野のライフヒストリーと重ね合わせながら、当時を知る関係者 2 名への聞き取りによって明らかにしていきたい。

### 3 創刊者・津野創一のライフヒストリー（誕生 - 琉球新報社記者時代）

津野は雑誌『青い海』の創業者であるとともに、晩年は推理作家としても知られている。津野の小説は、沖縄の歴史や文化を背景にしたミステリーで地元の風土や社会問題を巧みに取り入れているが、それは新聞記者や雑誌編集者としての経験と強く結びついている。津野のライフヒストリーを通観すると、沖縄と大阪とを往来しつつ雑誌を作る媒介者として、あるいは語る場の提供を創出する役割を、津野が担っていたことが分かる。

津野にとって最初の「移動」は、1937 年に「湾生（台湾生まれの沖縄県

注 18 村上陽子（むらかみ ようこ）沖縄国際大学教授。専門分野は沖縄・日本近現代文学。

注 19 村上陽子「『青い海』創刊時の誌面から見る〈復帰〉前後の沖縄」（『青い海復刻版 別冊』三人社、2024 年。72-86 頁）

注 20 広告会社名。詳細は 38 頁に記載。

注 21 松下博文（まつした ひろふみ、1956 - ）筑紫女学園大学文学部日本語・日本文学科教授。

注 22 松下博文「解題『青い海』全景 -70 年代から 80 年代の沖縄を駆けぬけた Hybrid 誌-」『青い海』解題・総目次・執筆者索引』三人社、2021 年、5-9 頁。

人)」として生まれ、敗戦後、母の郷里である石垣島へ引き揚げたことから始まる。1953年9月、八重山高校1年生の時、那覇市に一家で引越しをした。首里高校へ転校し、その時期に那覇で発行されていた高校生向けの雑誌、『蛍雪時報』の懸賞文芸に応募したところ、「このごろ」や「目覚め」などの作品で一等賞を手にした。その選考委員には、後に芥川賞作家となる大城立裕がいた。自信をつけた津野は、1955年7月高校3年の時、文芸同人倶楽部を立ち上げ『養秀文芸』という文芸誌を発行した。1956年に琉球新報へ入社し営業職に就いていた津野は、その文才を認めていた大城の提案により、編集局の社会部に勤務し警察担当をすることになった。その後、コザ市にあった中部支局へ異動する。1958年12月には、連載ルポ「27度線は生きている」を12回にわたって連載し、沖縄が持つ社会的な不条理さを民衆的な目線で書いた。その後1961年8月に、津野は24歳で関西支局に転勤した（写真6）。

津野の大阪時代を知る、新川明<sup>23</sup>に、当時のことについてインタビューを行った。

#### ① 新川明との出会い（1954-1956年まで）

新川明との出会いは、津野の高校時代にまで遡る。津野とは『琉大文学』で高校生の文芸部の人たちとの接触の中で会ったのが最初であった。

そのことについて新川は次のように語る。

津野君は僕の5歳下ですが、彼が首里高校の頃に（写真7）『養秀文芸』をしていて、僕は『琉大文学』で当時、各高校の文芸部員との交流がありました。大城立裕氏は「近所に住む高校生の徳田安敬とその同級生の津野創一、『琉大文学』の新川明、岡本恵徳、川満信一<sup>24</sup>、文芸サロンで一緒だった太田良博<sup>25</sup>、すでによく詩を書いていた池田和<sup>26</sup>、画家の安谷屋正義<sup>27</sup>ら」が訪ねてきた、と本<sup>28</sup>に書いてあるんですがね、僕はこの時期、山川町の池城殿内の母屋の裏座敷に間借りをしていたんですよ。で、同じ敷地内に別棟があって、そこに新婚の大城氏が住んでおりました。だから自然に声をかけあうことは、あったと覚えています。

津野はこの頃、ニシムイ<sup>29</sup>の画家たちと顔を合わせていた可能性が高い。なぜなら、『青い海』の創刊号で、大城皓也がはなむけの言葉を寄稿していることと、その後、数号に渡り、表紙画を寄せてもらっていることによる。しかしながら表紙画についての解説と分析はまだ十分でないため、次号以降の論文で分析を進めたい。

注23 新川明（あらかわ あきら、1931 - ）元・沖縄タイムス社長、思想家。新川の出発点として、1953年7月に創刊された『琉大文学』に辿り着く。発行部数が500部程度にしか過ぎない大学同人誌であるが、畏敬を込めた伝説的な響きをもって語られる雑誌である。『琉大文学』は23年間に計34冊、78年に4巻4号を出したまま途絶えてしまった。

注24 川満信一（かわみつ しんいち、1932 - 2024年）元沖縄タイムス社取締役、詩人。個人誌『カオスの貌』主宰。

注25 本名は伊佐良博（いさ よしひろ、1918 - 2002年）沖縄県那覇市生まれ。沖縄民政府、沖縄タイムス、琉球放送局、琉球大学図書館、琉球新報などに勤務。詩、小説、随筆、評論などを発表した。

注26 池田和（いけだ かず、1932 - 1978年）詩人、エッセイスト。

注27 安谷屋正義（あだにや まさよし、1921 - 1967年）洋画家。

注28 大城立裕『光源を求めて』（沖縄タイムス社、1997年）

注29 ニシムイは、米軍占領下の沖縄県那覇市首里儀保町において美術家らが形成した生活共同体。大城皓也、玉那覇正吉、安谷屋正義ら美術家たちが居住していた。

## ② 大阪での新川明と津野創一（1961-1963 年まで）

その後、新川は沖縄タイムスへ 1955 年に入社し、1957 年に鹿児島支局へ異動をした。1959 年 3 月には鹿児島から大阪に配属になり、63 年 3 月 1 日まで関西支社で記者をしていた。「僕が組合運動をした懲罰的な人事異動でしたが、鹿児島支局に、いや支局なんてなかったところへ追いやられた。もともと通信員が一人いるだけで。それは別に専任の通信員っていう訳ではなくて、タイムスの幹部の友人が鹿児島で材木屋をしていて、その人を通信員として委嘱していた。そういうわけで、鹿児島に支局を置くといって、僕はおっぱらわれた。」一方、津野は 1956 年 4 月から琉球新報社へ入社する。新川はそれを人づてに聞き、「なんで営業部に入ったりしたんだろう？」と思いつつ、他社ということもあり、付き合いは途絶えた。新川氏はその後、1958 年の 2 月に関西支社へ赴任したことで、はからずも大阪で、1961 年に転任してきた津野と再会した。新川と津野とはよく取材を共にしていたという。その頃の記者時代について、再び新川に聞いた。

関西支社の守備範囲は大阪、それから北の方はいわゆる中京方面ですね。富山県にも結構行ったし。南は岡山県あたりまでだった。そこで何か沖縄関係のイベントがあるとか、あるいは集団就職の若者達がやってきた時に、取材しました。まだみんな子どもだからね、中学を卒業してやっぱりこうホームシックになって帰ったりしてね。若者達の就職先は関西中心で名古屋市や岐阜県あたりが多かったですね。和歌山県にきた子もけっこういたね。その集団就職先の取材と、関西、中京、中国方面の県人会のイベント等がある時の取材。それからメインは、大阪の県人会の活動と、それから兵庫県の方ですね。大阪以外のところで沖縄関係のイベントがあった場合は、会社は違うけれど、津野君と声かけあって一緒に行くということは、よくあった。

## ③ 雑誌『青い海』と新川明

1969 年に東京支局への異動を経て、津野は 1970 年 8 月に 14 年間勤務した琉球新報社関西支局を退社し、大阪に居留したまま雑誌創刊の準備にかかる。それに賛同し表紙画を提供したのが、儀間である。他の画家の表紙画と比較して、儀間のそれは郷土色を前面に出している。津野は雑誌の企画を通じて、次第に沖縄固有の文化を深める特集へと傾注していった。二人に共通する雑誌のメリットは、編集者としての独り立ちを望んだ津野と、1950 年代から大型の油絵を公募展へ出品していたものの、個展などの展覧会を開く資金に乏しかった儀間が、共に発表の機会を捉えようとしていたところにある。儀間は『青い海』で、その表紙に「描き下ろし（新作）」の油絵を載せ（写真 1）、多くの目に触れる機会を作った。儀間は創刊号表紙画

《舞姫》のテーマについて「この作品で云いたいのは、沖縄がどんな状況にあらうと、民族の誇りと、文化を守ろうとする若人のけがれのない瞳の美しさなのです(創刊号 135 頁)。」と語った。1971 年の創刊号から 3 号まで描かれた儀間の表紙画は油絵具で黒く太い輪郭線を持ち、たくましく、強い、働く女性像が、いずれも儀間の意図する崇高さとともに描かれている。

雑誌『青い海』と新川との付き合いは、沖縄に事務所を移転した 1975 年頃からとなる。大阪で『青い海』が創刊される 1971 年以前には、大阪ですでに沖縄と「本土」を結ぶ雑誌『沖縄ジャーナル』<sup>30</sup>が山城賢孝の出資によって創刊されていた。津野は記者活動の経験から、他府県内でのマイノリティであるウチナーンチュに寄り添う雑誌の構想を立てた。雑誌の出版に取り組むには費用と人材が必要である。『青い海』は、大阪市北区にあった広告会社「オキナワ通信」代表・奥村毅氏が発行人となり、1971 年 4 月に創刊号が発刊された。雑誌の題名に付されるキャッチフレーズ<sup>31</sup>には、1971 年 4 月創刊号から 72 年 5 月号通巻 12 号まで「明日の沖縄をつくる若い広場」とあるが、これはオーナーである奥村の意向で、特に集団就職を求める本土企業や県外進学を目指している学生向けの私立大学等を広告に掲載する必要があり、若者に遡及力のある内容が求められていた。『青い海』の事務所も「オキナワ通信」の中にあり、発行所名は「おきなわ出版株式会社」であった。ちなみに、沖縄が米国統治下だった当時は、大阪で印刷した『青い海』を送るには輸出手続をしなければならなかったが、間に合わず創刊号は「非売品」となり、第 4 号から「定価 100 円・25 セント」となった。<sup>32</sup>

1975 年 5 月に津野が大阪から帰郷し、那覇市久茂地 3 丁目のロイヤルビル内に事務所を構えた。八重山支局から本社へ戻っていた新川が、時々顔を出すようになった。

『青い海』が一銀通りにあった頃、僕はタイムスから歩いて十分もかからないから、時間があると顔を出していた。津野君が空いて居れば碁を打つし、空いていなければお茶飲んで帰るというわけさ。『青い海』で企画があれば、座談会に引っ張り出されたりしてね。あるいはまあ、ちょっとした文章を書いたりして。

その中でも、1975 年 10 月号第 5 巻第 8 号から 10 月号の第 6 巻第 9 号まで、9 回続いて耳目を引いた新里恵二<sup>33</sup>との激しい論争は、多くの読者の注目を集めた。

注 30 『〈本土と沖縄を結ぶ〉沖縄ジャーナル』1969 年 9 月 創刊号、編集・発行人 元長栄、1969 年 8 月 15 日創刊。新城栄徳氏によると、この雑誌は 70 年に『沖縄ポスト』と改題し、10 号で休刊する。(琉文 21 ryubun21, net)

注 31 「明日の沖縄をつくる若い広場」(1971 年 4 月創刊号 -72 年 5 月号通巻 12 号)、「沖縄のころ」(1972 年 6 月号通巻 13 号 -73 年 8 月号通巻 25 号)、「沖縄の郷土月刊誌」(1973 年秋季号通巻 26 号 -83 年 11 月号通巻 127 号)、「沖縄の総合月刊誌」(1984 年新年号通巻 128 号～85 年 9 月号通巻 145 号)。

注 32 永峰真名「郷土月刊誌『青い海』のころ—伝説の雑誌と編集人・津野創一」、『ウチナーパワー沖縄回帰と再生』、コモンズ、2010 年 138-145 頁。

注 33 新里恵二(しんざと けいじ、1928 - 2013 年) 弁護士、歴史家。

#### ④ 『新沖縄文学』と『青い海』との交点

少し視点を変えて、1966年に創刊された『新沖縄文学』を、津野は『青い海』という雑誌づくりにおいて、どのように意識をしていたか。あるいは、『新沖縄文学』と『青い海』が、どのような差異を意識していたのかについて、新川へのインタビューから推察してみたい。

沖縄タイムス社出版部による『新沖縄文学』は、創刊当時、沖縄は「文学不毛の地」という言葉が流行り、ウチナーンチュ自身もそのように自認をしていたところであった。当時のタイムスの経営者である役員の豊平良顕<sup>34</sup>と牧港篤三を中心に、「そうあってはならない」ということで始まった、文学、思想の雑誌である（新川、2024）。

また新川は1975年から文化事業局出版部の出版編集部長として、『新沖縄文学』の編集に関わる。その時から編集委員会というものをつくり、社内では川満信一、社外は岡本恵徳、新崎盛暉<sup>35</sup>、比屋根照夫<sup>36</sup>、我部政男<sup>37</sup>を編集委員に委嘱して企画を検討してもらい、定期的に寄稿もしてもらうというシステムをとった（新川、2024）。

津野が沖縄に帰ってきてからは、『青い海』は総合郷土誌ということで、歴史や民俗、芸能や音楽にいたるまで、さまざまなジャンルの総合誌として変化していく。津野が一番興味を持ったであろう文学については、すでにより専門的な『新沖縄文学』があったため、総合郷土誌としての傾向を強めた可能性は少ない。

注 34 豊平良顕（とよひら りょうけん、1904 - 1990 年）沖縄タイムス最高顧問。

注 35 新崎盛暉（あらさき もりてる、1936 - 2018 年）歴史学者。

注 36 比屋根照夫（ひやね てるお、1939 - ）近代日本政治思想史、アジア・沖縄関係史専攻。

注 37 我部政男（がべ まさお、1939 - ）日本史学（近代日本政治史）。

## 4 画廊沖縄・上原誠勇との出会い

### ① 「青い海ギャラリー」の誕生

沖縄の老舗画廊である「画廊沖縄」の創設者、上原誠勇<sup>38</sup>は1977年の10月から81年5月まで、青い海出版社に勤務した経験がある。上原に第一子（長女）が生まれて4か月になった頃、自筆の履歴書を持ち込んで、青い海出版社を訪ねた。その面接に応じたのは、編集長の津野であった。

大嶺信一<sup>39</sup>が主宰するエンブリオ美術研究所<sup>40</sup>で、画家を志す上原は、絵画を学びながら電子関係の職に就いていた。しかし、画家になるために、沖縄の文化をもっと知りたいと、青い海出版社の門戸を叩いたのだった。営業の職であれば空きがある、と答える津野に「編集長、沖縄の美術家に取材をさせてくれませんか？」と上原が申し出ると「おお、いいよ」と二つ返事で、津野は快諾した。そして、1977年12月30日発行第8巻第1号（通巻69号）で初めて「青い海ギャラリー」が掲載となった。しかも、カラーグラビアだった。当時は1頁のカラー広告掲載料金が10万、15万円ほどしたので、広告の担当者から「お前はよくも贅沢に、カラーグラビアで沖縄の絵かきたちのものを載せて」と、苦言を呈されたという。しか

注 38 上原誠勇（うえはら せいゆう、1947 - ）「画廊沖縄」経営者、The Gallery Voice 紙発行（1988 - ）。

注 39 大嶺信一（おおみね しんいち、1915 - 1984 年）洋画家。1964年にエンブリオ美術研究所を設立する。

注 40 エンブリオ研究所へは1973年3月から1981年末まで通った。

しながら上原は、『青い海』に芸能や音楽の紹介だけではなく、美術の誌面ギャラリーを持てたことに喜びを感じていた。ちなみに、栄えある第1回は大城皓也《マドリードの夜》であった。

上原は、取材したいアーティストを50名程リストアップして、約40名への取材をした。画家として身を立てる夢を叶えるために、大嶺政寛<sup>41</sup>をはじめ、玉那覇正吉、大城皓也らのアトリエへ通い、話を聞くことで、絵を描くことや生計を立てていくことの厳しさを見て学んだ。アーティストという職業は生半可ではできない、という大変さとその世界を実感することは、後々、上原が自身の夢であった画家としての立身を、断念することへもつながっていった。

先輩たちのアトリエを取材で訪ねるという仕事は、画家になりたかった僕の転機になりました。大嶺政寛先生や大城皓也先生のアトリエを訪ねると、良い絵を、必死に描かれておられる。大嶺政寛先生なんかは、カラーグラビア<sup>(写真5-1)</sup>をやるだけでも「エー、ワンナー、チガインロー(僕はほかの画家と違うよ)」と、プロ意識が強かったしね。そして若い作家たちは、教員として働きながら創作を続けて、右往左往と迷っているでしょう？ 沖展に出品して何とか美術活動を続けておられた。僕が会社の経済的な事情で「青い海出版社」を辞めざるを得なくなった時、画廊経営は厳しいと耳には入っていたが、覚悟して81年10月に企画画廊を立ち上げたの、キャンバスも絵具も友達にあげて。自分が絵を描いている場合じゃない、と固く決心した。

沖縄のアートを一般大衆の生活の中に、取り入れてもらおうと。

また間接的にはあるが、上原が「青い海ギャラリー」で得た画家との縁が、1982年、月刊沖縄社の画集『沖縄現代画家78人』<sup>42</sup> 発刊へとつながったことも上原の功績といえる。その経緯は、次のとおりである。

あの画集のきっかけとなったのは、三木健さんですよ。当時、三木さんは琉球新報の文化部記者でしょ？ 画廊開業の取材で話しているうち僕が『青い海』にいた頃に画家の顔写真を撮ったり、プロフィールもファイリングしていたことを評価してもらった。81年に『青い海』を辞めた後も、僕が画家への取材を続けたりしていたのを三木さんが見て「ぜひ画集に下さいよ。僕、出版社を紹介してあげるから。」と言われ、月刊沖縄社を紹介された。

『沖縄現代画家78人』は、作品撮影を嘉納辰彦<sup>43</sup>、装丁が宮城明<sup>44</sup>、そして編集協力に「画廊沖縄・上原誠勇」と、沖縄の出版業界が80年代に

注 41 大嶺政寛（おおみね せいかん、1910 - 1987 年）洋画家。沖縄民芸協会会長を務めた。

注 42 『画集 沖縄現代画家78人 戦後美術の流れと現状』月刊沖縄社、1982年11月初版。戦後沖縄の美術の多様性を俯瞰した、先駆的な画集である。

注 43 嘉納辰彦（かのう たつひこ、1952 - ）写真家。

注 44 宮城明（みやぎ あきら、1945 - ）現代アーティスト。

入りそれまでを凌駕する勢いで美術画集にも傾注していった時期である。

## 5 雑誌『青い海』の持つ個性と社会的ニーズ

『青い海』は一般大衆の生活の風景から古典の世界まで、歴史や政治などジャンルが広い。一般向けに庶民、市民向けから専門家まで、幅が広くて掘れるところは深く掘ろうという、手が伸びるところまで伸ばそうというような、そういう振幅の大きな雑誌であり、一般の人々に親しまれた。『青い海』が刊行された、70年代初頭から80年代半ばまで、沖縄本土では大きな転換期を迎えていた。創刊時は県外就職の若者向けに特集を組んでいたが次第に変化していくその意味について、津野はNHKのインタビュー番組（1977）<sup>45</sup>で、次のように語っている。

注 45 NHK インタビュー番組「私の5年 津野創一」（1977年5月12日放送）

最初、（『青い海』は）若い人たちに読んでいただきたい、若い人たちが大変だ、という印象を持っていた。ところが、いろんな反響をいただいてみますと、実はその若い人よりも40代、50代の方たちがね、もっと沖縄の歴史を、文化をどんどん載せてくれと言うんですね。僕は、最初は本当に意外だという気持ちが出て。ところが、やっぱり自分自身に照らし合わせてもそうですけれども、歴史的に土着のもの、つまり沖縄的なものというのは、どちらかというと、ちょっと劣るものであるという風な認識を植え付けていった、ないしは、植え付けさせられていったような部分が大変あって。そういう人たちが今40代、50代だったりね、つまり学ぶのにも学べなかった世代ですね。その方たちは今の若い人の親世代なんですよ。そういう方たちがね、非常に渴望というか、そういったものを訴えてこられたということで。つまり若い人ももちろん読んでいただきたいけれども、同時にそういう方にもですね、お読みいただける雑誌にならなくちゃいけないということで、少しずつそういう脱皮をしていきました。

また青い海出版社は、様々な交流の場としても機能していた。『青い海』の事務所には、大阪から儀間比呂志や、沖縄の歴史や文化に造詣の深い新城栄徳<sup>46</sup>、また、津野の琉球新報時代の同僚であった写真家の森口豁や三木健も、よく訪れていた。のちに古典音楽・琉球三線の人間国宝となる大湾清之は、上原が『青い海』事務局で総務部長を務めた頃の同僚であった。「スタッフの個性を引き出すブランドが、『青い海』だった。」と述懐する。「雑誌の誌面と関係するような人が、そこに集まっていた。出会いの場でしたね。」（上原、2024）

注 46 新城栄徳（しんじょう えいとく、1948 - ）「琉文21」主宰。

また上原によると、1980年頃は1万2千部刷っており、沖縄県内のみならず、県外、海外では南米、北米、ハワイの県人会にも定期購読者が存在

していた。毎号とも定期購読を入れて8千部以上は売れていた。沖縄県内の書店だけで2千部から2千5百部くらいは売っていた。この頃の『青い海』は、雑誌として勢いのある時期だったのだろう。

上原は1981年5月に辞めた後、同年10月に那覇市前島で画廊沖縄を開業した。

『青い海』には魅力があった。時代がそれを要求したのでしょうね。日本復帰とともに日本化の波が押し寄せて、その先に1975年の海洋博覧会による、経済的な盛衰があった。本土から資本が投入され、それによってインフラ事業が進行する。特に、道路の整備とかで赤土の流出被害があって、漁業に影響が出てくるなど生活の中で激しい変化があったでしょう。それで一部の沖縄の人々が「日本復帰してよかったのか」という、懐疑的な気持ちになった。米軍の起こす問題ももちろんあるけれども、当時は乱開発によって沖縄の自然が壊されていく感じが否めなかった。だから「ワッターヌ、ウチナードー（我らの沖縄だ）」と、アイデンティティを再認識する時期でもあった。一方、『青い海』は復帰の前年に大阪で創刊され、1975年に拠点を沖縄へ移した。それが沖縄の人にとっては、まるで命拾いするかのような感覚じゃなかったかな。最初は『青い海』が脚光を浴びるなんて誰も考えて無かったけど、社会状況の変化に伴って『『青い海』？結構まじめなこと、書いてるじゃない』と、なった。新川明さんと新里恵二さんの激しい論争とか、『新沖縄文学』では掲載できなかったかも知れない。『青い海』がもてはやされ出したのは、そんな時代ですね。

（この稿続く）

## 6 インタビュー

上原誠勇氏 2024年7月27日 / 新川明氏 2024年12月21日

この場をお借りして、快くインタビューに応じてくださいました上原氏、新川氏に厚くお礼を申し上げます。

## 7 参考文献

青い海出版社 編『はだか沖縄 ジャンプ・イン《沖縄》青春広場』、株式会社六月社書房、1972年。

儀間比呂志『沖縄 儀間比呂志の版画』、講談社、1974年。

大城立裕「津野創一の文学」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&

追悼文集 -』ニライ社、1993 年、458-466 頁。

仲程昌徳「故郷離脱者たちのこころ」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&追悼文集 -』ニライ社、1993 年、467-469 頁。

岡本恵徳「津野創一と雑誌『青い海』と」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&追悼文集 -』ニライ社、1993 年、470-475 頁。（初出：岡本恵徳『沖縄文学の情景』ニライ社、2000 年、277-283 頁。）  
佐野洋「津野創一氏の歩み」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&追悼文集 -』ニライ社、1993 年、476-482 頁。

三木健「根っからの社会派記者」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&追悼文集 -』ニライ社、1993 年、483-489 頁。

平山良明「百科全書『青い海』の編集者」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&追悼文集 -』ニライ社、1993 年、490-494 頁。

山城賢孝「人間と人間のかすがい 共に『青い海』をつくって」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&追悼文集 -』ニライ社、1993 年、495-499 頁。

石垣博孝「約束」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&追悼文集 -』ニライ社、1993 年、500-501 頁。

伊良皆高吉「たった一度のけんか」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&追悼文集 -』ニライ社、1993 年、502-504 頁。

上原直彦「何時語らゆさ、創一兄」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&追悼文集 -』ニライ社、1993 年、504-505 頁。

徳田安敬「充実した高校時代 - 『養秀文藝』の頃」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&追悼文集 -』ニライ社、1993 年、505-507 頁。

川満信一「惜別」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&追悼文集 -』ニライ社、1993 年、507-509 頁。

島袋数也「駆け出しの頃」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&追悼文集 -』ニライ社、1993 年、509-510 頁。

近田洋一「後退しない精神」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&追悼文集 -』ニライ社、1993 年、510-511 頁。

岡部伊都子「初めて会った温顔の君」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&追悼文集 -』ニライ社、1993 年、512-513 頁。

宮城晴美「津野さん、ありがとう - 若者を育てた名編集者へのレクイエム」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&追悼文集 -』ニライ社、1993 年、513-515 頁。

小波津貞子「さよならは、もっと先に」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&追悼文集 -』ニライ社、1993 年、515-516 頁。

大城真栄「甲子園で出会った好青年」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&追悼文集 -』ニライ社、1993 年、516-517 頁。

上江洲久「『ここに榕樹あり』と津野君」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&追悼文集 -』ニライ社、1993 年、517-519 頁。

石川文洋「創一さん」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&追悼文集 -』ニライ社、1993 年、519-520 頁。

森口豁「創一くん、肩ぬ荷や降しよう」、『青い海の彼方へ - 津野創一の世界 遺稿&追悼文集 -』ニライ社、1993 年、521-522 頁。

新川明『沖縄・統合と反逆』筑摩書房、2000 年、84-91 頁。

新城栄徳「沖縄の雑誌に見る「自己意識」1、『青い海』を通して」、『沖縄を深く知る事典』、日外アソシエーツ株式会社、2003 年 2 月、134-135 頁。

永峰眞名「郷土月刊誌「青い海」のころ - 伝説の雑誌と編集人・津野創一」、『ウチナーパワー沖縄回帰と再生』、コモンズ、2010 年、138-145 頁。

天久斉「青い海（総合雑誌）古本屋が見た「青い海」」、『琉球・島之宝』創刊号、うる文化協会、2014 年、69-72 頁。

我部聖「琉大文学（同人誌）戦後沖縄を切り開く表現の場」、『琉球・島之宝』創刊号、うる文化協会、2014 年、35-37 頁。

金城馨『沖縄人として日本人を生きる』（株）解放出版社、2019 年、19 頁。

我部聖「沖縄の戦後雑誌概観」『社会文学』第 50 号、不二出版（株）、2019 年 8 月、105-108 頁。

松下博文「「青い海」全景 -70 年代から 80 年代の沖縄を駆け抜けた Hybrid 誌 -」、『「青い海」 解題・総目次・執筆者索引』株式会社三人社、2020 年、5-9 頁。

本浜秀彦「沖縄の文学と視覚文化が会う「場」としてのブックカバー - デジタル世代の小説とアートの関係性を探る -」『文教大学国際学部紀要』第 33 巻第 1 号、2022 年 7 月、59-91 頁。

三木健「沖縄戦後史の中の『青い海』時代」、『青い海 復刻版 別冊』、株式会社三人社、2024 年、11-30 頁。

阪井芳貴「「沖縄のこころ」を発信しつづけた『青い海』」、『青い海 復刻版 別冊』、株式会社三人社、2024 年、45-52 頁。

松下博文「〈青い海〉をめぐって（戦後沖縄雑誌表紙管見）」、『青い海 復刻版 別冊』、株式会社三人社、2024 年、53-71 頁。

村上陽子「『青い海』創刊時の誌面から見える〈復帰〉前後の沖縄」、『青い海 復刻版 別冊』、株式会社三人社、2024 年、72-86 頁。

新川明「追走の雑誌『青い海』」、『青い海 復刻版 別冊』、株式会社三人社、2024 年、89-90 頁。

石川文洋「激動の時期。状況と文化を表現した月刊誌」、『青い海 復刻版 別冊』、株式会社三人社、2024 年、91-94 頁。

宮城晴美「原稿を叩きつけられる」、『青い海 復刻版 別冊』、株式会社三人社、2024 年、95-97 頁。